

# 社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割に関する検討 —アメリカ合衆国の博物館の事例から—

松橋 義樹  
(東京大学大学院生)

## 【要旨】

社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割に関しては、コーディネーターの存在がボランティア活動の支援のために必要不可欠であると考えべきなのか、さらにはその支援が施設におけるボランティア活動の展開をどのように方向付けていくのか、というような問題について、いまだ議論の余地が大きい。本論文では、社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割をめぐる課題として、①コーディネーターの役割の重点化、②誰がボランティア・コーディネーターとしての役割を果たすのか、という2点を提示した後、ヒアリング調査に基づき明らかになったアメリカ合衆国における博物館の事例を取り上げ、今後継続して検討すべき問題の明確化も含めて、上記2点の課題についての検討を試みている。

## 1. 本論文における課題意識

社会教育施設におけるボランティアの受け入れが全国的な動向となったのは、1980年代後半以降であると考えられる。1986年に社会教育審議会社会教育施設分科会報告「社会教育施設におけるボランティア活動の促進について」が出されていることも、そのことを少なからず示しているであろう。また、この報告から約20年が経過し、社会教育施設においてボランティアを受け入れること自体はすでに珍しい取り組みでは無くなり、多くの事例において共通に指摘されるような受け入れ上の課題もいくつか出てきている。

そうした課題の一つに、ボランティア・コーディネーターの問題が挙げられる。ボランティア・コーディネーターの存在意義や役割・課題などをめぐる多くの議論は、コーディネーターの存在が社会教育施設におけるボランティア活動の支援のためには必要不可欠なものであるという前提に立っており、その上に積み上げられてきたものであることは否定できないであろう。

しかし、コーディネーターの存在がボランティア活動の支援のために必要不可欠であると考えべきなのか、さらに、その支援が施設におけるボランティア活動の展開をどのように方向付けていくのか、というような問題については、いまだ検討の余地が大きく残されているのではないだろうか。広く一般のボランティア活動と比較して社会教育施設におけるボランティア活動が持つ特性と考えられる点、特に生涯学習・社会教育の活動としてのボランティア活動という位置付けを考慮しつつ、社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割についての検討が求められるであろう。

本論文は、以上のような問題意識にもとづき、社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割について検討することを目的としている。具体的な作業としては、まず社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割に関連する先行研究を取り上げ、そこから示唆される検討の方向性を整理する。次に、筆者がその計画・実施に関わった、アメリカ合衆国の博物館に対するその施設ボランティアに関するヒアリングの内容を、特にボランティア・コーディネーターの存在意義やその役割・課題に関する部分を中心に提示する。最後に、その内容をもとにして、社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割について今後検討を進めていく上で重要な課題と考えられることを、本論文の結論として述べる。

## 2. 先行研究から示唆される検討の方向性

社会教育施設におけるボランティア活動に関する調査研究にはすでに一定の蓄積が見られるが、その中でボランティア・コーディネーターに焦点を絞ったものはそれほど多くはない。また、ボランティア・コーディネーターをめぐる議論は、施設職員のあり方をめぐる議論とも深く関連を持つものであると考えられ、今後は両者を接合させた議論を発展させることが求められていると思われる。

### (1) 国立教育会館社会教育研修所「ボランティア・コーディネーター養成・研修プログラム開発事業」(1996年～1997年文部省委嘱事業)

この調査研究では、調査研究の対象となるボランティア・コーディネーターの活動の場を社会教育施設に限定しているわけではないが、報告書では「ボランティア・コーディネーション」の注目すべき事例として「埼玉県県民活動総合センター」「国立科学博物館」「国立婦人教育会館」の事例が挙げられているなど、社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割とその課題に深く関連を持つ調査研究であると位置付けられる。この調査研究では、社会の変化から導き出されるボランティア活動の必要性・重要性を前提として、ボランティア・コーディネーターがそのボランティア活動を支援するための重要な存在として位置付けられており、ボランティア・コーディネーターの養成・研修プログラム試案の作成、及びその試案に基づくプログラムの実施と評価も含め、コーディネーターの役割を可能な限り広く捉えて具体化しつつ、ボランティアの自立性を最大限に尊重する方向が目指されている。

報告書においては、ボランティア・コーディネーターの定義やその役割などは必ずしも統一されているわけではないが、まず、基本的な見解として、ボランティア・コーディネーターとは「ボランティア活動を希望する者やボランティアを必要とする者のニーズに対応して総合的に調整していく人」<sup>1)</sup>を指し、主に、①社会教育施設も含めてボランティアが活発に展開されている施設においてはボランティア活動にかかわる需要と供給を点検し調和させるべくボランティアとさまざまな機関・人物の橋渡しをする役割としてのコーディネートをする人が存在していること、②その役割は必ずしもボランティア・コーディネーターと呼ばれる職員ではなく社会教育主事、ボランティア・センターの職員、ボランティア自身がコーディネート機能を仕事の一環として行っているものであること、そして、③ボランティア活動を積極的に展開していくためには、ボランティア・コーディネーター

としての役割を果たす人が必要であることが主に指摘されている。<sup>2)</sup>

また、報告書には、ボランティア・コーディネーターの役割を項目として整理している議論も含まれている。例えば、ボランティア・コーディネーターの役割を「受け止める（ニーズ、活動希望者の受付など）」「求める（ボランティアの募集、活動の場の調整）」「結ぶ（調整・紹介）」「高める（訓練・学びの場づくり）」「作る（ネットワーキング、アクション）」「まとめる（記録・統計）」「知らせる（広報）」「集める（情報収集）」の8つに整理して「これら8つの仕事を、コーディネーターが1人で完全に担うことは不可能だろう。当然、ボランティアや他のスタッフも交えての分担の態勢を考えていかなければならない」と指摘している議論がある<sup>3)</sup>。また、これとは別に、「学習成果の発展ニーズ」「自己実現ニーズ」「課題の発見ニーズ」の3つのニーズに対応するためのボランティア・コーディネーターの「サービス内容」を、「情報サービス」「アドバイザー・サービス」「コーディネーション・サービス」「学習プログラム・サービス」「活動プログラム・サービス」「ネットワーキング・サービス」「拠点サービス」「マネジメント・サービス」「研究情報サービス」「アドボカシー・サービス」の10個に整理し、ボランティア・コーディネーターの新たな課題として、ボランティア活動の「世代」「活動形態」「情報メディア」「教育ニーズ」の多様化、「専門性の拡大」「グローバル化」への対応を挙げている議論もあり<sup>4)</sup>、コーディネーターの役割を細分化させながらとらえていこうという全体的な傾向が見られる。

## (2) 財団法人日本科学技術振興財団「科学館におけるボランティア活動の推進に関する調査とプログラム開発」（1996年～1998年）

この調査研究は、日本及びアメリカ合衆国の科学系博物館に関する調査をもとに、博物館における「ボランティア・プログラム」の開発を試みている。特にアメリカ合衆国の科学系博物館に対するヒアリングにおいては、施設のボランティア・コーディネーターの役職にある職員をヒアリングの対象者として、施設のボランティア・プログラムの全体像の把握をヒアリングの中心目的としつつ、その中でコーディネーター自身の職務にも注目がなされている。

報告書においてはボランティア・コーディネーターに関して、①米国においては、ボランティア・プログラムの運用に際し、コーディネーターの存在は確立していること、②職員とボランティアの仲介者としての役割を果たし両者間の問題解決のためにも機能していること、③コーディネーターの意識、行動力がボランティア・プログラムの運営に大きな影響力をもつともいえることなどが指摘されている。さらに、アメリカ合衆国におけるコーディネーターの養成・研修に関しては、①ボランティア組織や大学においてはその育成のためにコースが設置されシンポジウムやセミナーが開催されていること、②地域においてはコーディネーターの情報交換のための会議が開催されること、③コーディネーターはさまざまなネットワークを利用して情報収集に努めプログラムの運営を行うことにも注目されている<sup>5)</sup>。

また、この報告書においては、Joan Kuyper, Ellen Hirzy, Kathleen Huftalen, *Volunteer Program Administration : A Handbook for Museums and Other Cultural Institutions* (American Council for the Arts in association with American Association for Museum Volunteers, 1993) の一部が翻訳・引用・参照されており、ボランティア・

コーディネーターの仕事として「博物館とボランティア・プログラムの相補的な理念を理解し、支持し、推進する」「ボランティア・プログラムと館職員との連絡係として行動する」「ボランティアの採用、配置、研修をコーディネートする」「ボランティアに対する評価基準を確立する」「ボランティアとボランティア・プログラムに関する記録を更新・保守・管理する」「ボランティア・プログラムの定期的評価を開始する」「地域社会においてボランティア・プログラムを広報する」「ボランティアに対して専門的な能力開発の機会を継続することを求める」ことが挙げられている。さらに、ボランティア・コーディネーターの資質については、「指導力」「運営管理能力」「コミュニケーション・スキル（意思疎通の能力）」の3つに大別されており、専門家としてのボランティア・コーディネーターの育成の必要性が提起されている<sup>6)</sup>。

社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターに関するこれらの先行研究から示唆されるコーディネーターの存在意義や役割・課題についての検討の方向性は、次の2点にまとめることができるであろう。1点目は、総花的・網羅的に取り上げられる傾向の強いコーディネーターの役割を、社会教育施設の種別や規模その他各施設を取り巻く状況などに応じて特定のものへと重点化していくことである。確かにコーディネーターは多様な役割をまんべんなく果たす必要があるという理念を否定することはできないが、現実には各施設のボランティア支援体制の現状をふまえた、コーディネーターの役割のあるべき姿がもっと追求されてもよいのではないだろうか。もちろん、その前提として、広く一般のボランティア活動と比較して社会教育施設におけるボランティア活動が持つ特性を明らかにすることは必要不可欠である。

2点目は、社会教育施設の種別や規模その他各施設を取り巻く状況などに応じて、誰がボランティア・コーディネーターとしての役割を果たすのかを明らかにすることである。職員がコーディネーターになるにしても、専任なのか兼任なのか、兼任ならばどの部署の職員が担うのか、そしてその違いに応じて求められるコーディネーターの役割がどのように異なってくるのか、などのことが検討すべき課題として浮かび上がってくる。また、ボランティア同士が相互にコーディネーター的な役割を担うことについても、職員がコーディネーターを担う場合との相違点や両者が併存することの可能性、さらにはコーディネーターという「肩書」自体の存在意義などが検討課題となるであろう。

また、以上の2点に関連して、生涯学習・社会教育の領域においては「救援のためのボランティア活動と同様にコーディネーターの意義を考えてよいのであろうか。コーディネーターという特別な役割をもった人の存在を考えるのではなく、ボランティアそれぞれがコーディネーター的役割を意識しながら活動することの方が重要なことではなかろうか。「効率」ということを、生涯学習・社会教育の領域でどのように考えるかということにつながることもあろう」という議論もある。そこでは、ボランティア活動の自発性・自律的性格が最重要視されていると理解できるが、ボランティア・コーディネーターに期待される役割が、単にボランティア活動と密接に関連するというだけではなく、そもそもボランティア活動とは別の活動として位置付けられるものではないという発想は、社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割に関する根本的な問題提起であるとも考えられる。

### 3. ヒアリングの概要とその分析

#### (1) ヒアリングの方法及びその分析方法

ここで取り上げるアメリカ合衆国の博物館に対するヒアリングは、社会教育計画研究会が2005年11月～12月及び2006年11月～12月に計8館に対して実施したものである<sup>8)</sup>。このヒアリングは、博物館におけるボランティアの受け入れに関して先進的な事例の多いアメリカ合衆国において博物館のボランティア担当職員に対するヒアリング及び関連資料の収集を行い、ボランティアの採用・養成・研修の現状と課題、ボランティアの活動の実態、ボランティアを受け入れることに対する博物館（職員）の考えなどを明らかにし、日本との比較をとおして、日本の博物館におけるボランティアの受け入れの課題について論点を整理しつつ検討することを目的としたものである。一般にボランティア活動の「先進国」として位置付けられてきたアメリカ合衆国において、さらに生涯学習支援・成人教育のための施設の中でボランティアの受け入れに積極的な施設の種類として博物館に注目することは、社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割に関して検討する上で重要な作業であると考えられる。

まず、ヒアリング先の選定について、2005年実施分に関しては、American Association of Museums, *The Official Museum Directory* (34<sup>th</sup> edition), National Register Publishing, 2004 を、2006年実施分に関しては American Association of Museums, *The Official Museum Directory* (36<sup>th</sup> edition), National Register Publishing, 2006、にそれぞれ掲載されている博物館を候補とした。前記研究会のメンバー間で博物館ボランティアに対する問題関心が必ずしも一致していない中で、全メンバーがそれぞれの問題関心について一定の検討が可能になるように、館種・規模などの観点から各メンバーがヒアリング先の候補を絞り込んだ。その上で、調査の時間的・予算的制約を考慮し、候補となる博物館の所在地の観点からメンバーを2手に分け、2005年調査においてはジョージア州アトランタ・イリノイ州シカゴにおける博物館に対して、2006年調査においてはマサチューセッツ州ボストン・ペンシルバニア州フィラデルフィアにおける博物館に対して、それぞれヒアリングを実施した。

本論文の執筆者に関していうと、大枠としては社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの役割について、より具体的には本論文の第1章及び第2章で言及したような問題意識を持っており、ヒアリングの内容からその検討が可能となるような博物館として計3館をヒアリング先の候補として提示し、その全てに対してヒアリングを実施することができた。この3館については、いずれも“Volunteer Coordinator”という肩書を持つ施設職員を対象にヒアリングを実施しており、うち2館については、ボランティア・コーディネーターの実際の役割に加えて、ボランティア・コーディネーター自身のボランティア活動さらにはボランティア・コーディネートも含めたボランティアに対する支援に対するヒアリング対象者の考えなどについても情報を得ることができた。本章では、その2館それぞれの概要<sup>9)</sup>とボランティア・コーディネーターに関するヒアリングの概要を取り上げる。

ヒアリングは、①ボランティアの概要（人数や活動内容など）、②ボランティアの採用、③ボランティアの養成・研修、④ボランティアの自発的・自主的活動（ボランティア組織の形成やニューズレターの発行など）、⑤施設に対する意見表明の機会・意見に対する施設

側の対応、⑥施設にとってのボランティアの活用の意味、の 6 つの項目からなる質問紙を事前に送付した上で、その質問紙をもとに各館 1 時間を目処として実施した。また、合わせて関連資料を提供してもらった他、ヒアリング終了後に職員の案内による施設の見学を行い、ヒアリング実施時に館内で活動していたボランティアからの情報提供も受けた。これは、前記の計 8 館全てのヒアリングに共通する調査過程である。

ヒアリング内容の分析に関しては、第 1 章及び第 2 章で言及したような問題意識をもとにして、前述した調査過程をふまえ、①ボランティアの採用・養成・研修に対するボランティア・コーディネーターの役割、②ボランティアの採用や養成・研修に加えてボランティア・コーディネーターが日常的にボランティアとどのように関わっているのか、③ボランティア・コーディネーター自身は館がボランティアを受け入れることの意味をどのように理解しているのか、という 3 点からの分析を試みた。その分析結果も、本章で取り上げる。

なお、本論文で取り上げるデータも含め、ヒアリングで得られた一連のデータについては、このヒアリングを含めた調査研究の研究代表者からその本論文における使用許可を得ているものであることをあらかじめ付記しておく。また、そのデータの分析に関しても、同じく許可を得ている。

## (2) ヒアリング対象施設の概要及びヒアリングの概要

### 1) National Constitution Center (ヒアリング日程：2006 年 12 月 3 日)

#### <施設概要>

住所：525 Arch Street Independence Mall, Philadelphia, Pennsylvania 19106

設立経緯：

アメリカ合衆国憲法及びその日常生活との関連について意識を高めるための独立の非党派・非営利組織として、1988 年に制定された Constitution Heritage Act に基づいて設立され、2003 年 7 月 4 日に開館した。

設備：

The American Experience (常設展示室)、Kimmel Theater、Signer's Hall (合衆国憲法の承認に参加した 39 名の彫像)、Liewellyn Citizen's Café、Freedom Rising

年間入場者数：320,000 人

職員構成：常勤職員 87 名、非常勤職員 56 名

#### <ヒアリング概要>

ボランティアと大学生インターン合わせて 115 名が活動している。活動領域は、① Gallery Hosts (展示エリアで来館者に対応、ハンズ・オンによる学習活動や各種実習の手助けも行う)、② Special Event Volunteers (各種特別のイベントにおいて、事務作業から参加者の活動の支援まで行う)、③ Visitor Services Hosts (館内の巡回や来館者からの各種問い合わせへの対応など) の 3 つに大別される。

ボランティアの採用については、その対象は高校生と高齢者が中心であり、学校や地域の市民活動施設に出向く他、ウェブサイトを用いて採用に関する広報を行っている。採用の手順としては、①希望者から申込書を受け取る、②希望者に対して電話で短いインタビューを行い、希望者の関心を把握する、③ボランティア・コーディネーターが、彼らが活

動したいと思っている部署と共同で面接を行う。

ボランティアの養成・研修については、段階的な研修と、ボランティア活動を通して仕事上の研修を行う。新人のボランティアは、長期間館で活動しているボランティアとともに活動させる。活動を初めてから 60 日後、及び活動を始めてから一年後に supervisor からの評価を受ける。6 ヶ月程度研修を受けたら再研修を行う。この他、来館者サービスなどの一般研修も行っている。

National Constitution Center においては、ボランティア・コーディネーターが研修の最初の段階としてボランティア・ハンドブックをもらった段階でのオリエンテーションを行う。そこでは、新人のボランティア全員を招き、館のポリシー、規定など館についての基本的な研修が行われる。研修プログラムは、Public Programs Trainer や Director of Visitor Services の助けを得ながら、ボランティア・コーディネーターが企画している。

ボランティア・コーディネーターは、全ボランティアに配布されるニュースレター（季刊、各季の新しいボランティアの紹介・ニュースやイベントの紹介・ボランティアに対する注意・社会的イベントや福利厚生に関するコラムなどを掲載）の作成や、館長との昼食会、全ボランティアを対象とした年 1 回のミーティングの開催などの責任者でもある。

施設にとってボランティアを受け入れることは、施設にとっての手助けとなるだけでなくボランティアとなる人に対するサービスでもあり、またボランティアにとっても学習や知識の共有の機会であったり、他者と知り合い仲良くなるための社会的機会でもある。そして、ボランティアが館にやってきてその活動がよい経験となり、ボランティアが無償の支援のために活用されるために来ているのではないということを明確にするのがこの館でのボランティア・コーディネーターの責任である。

## 2) The Academy of Natural Sciences（ヒアリング日程：2006 年 12 月 4 日）

### <施設概要>

住所：1900 Benjamin Franklin Parkway, Philadelphia, Pennsylvania 19103

### 設立経緯：

時代的・社会的要請を反映した有用な知識の普及のための自然科学の研究及び公衆への教育活動を担うことを目的として、母体となる団体が 1812 年に誕生し、1828 年に一般の人々も対象として開館した。

### 設備：

自然科学に関する 180,000 冊の蔵書、250,000 の著写物、25,000 枚の写真、3,320 冊の定期刊行物、実験室、子ども博物館、415 席の講義室、教室、ミュージアムショップ

年間入場者数：210,000 人

職員構成：常勤職員 210 名、非常勤職員 70 名

### <ヒアリング概要>

多い時期では約 200 名のボランティアが活動している。ボランティアの 3 分の 2 から 4 分の 3 がそれぞれの展示ホール (Butterflies, Dinosaur Hall, Diorama Hall Touch Carts, Live Animal Center, Outside-In Children's Nature Museum など) で活動し、残り 4 分の 1 から 3 分の 1 が裏方 (behind the scenes) として活動している。ボランティアの年齢は 13 歳から 80 歳までで、45% が高校生、10% が大学生、10~15% が退職者、残りが多様

な年齢層の成人である。

ボランティアの採用については、ボランティア・コーディネーターを中心とした職員がボランティアの仕事や責任・資質についてアウトラインを示した *job description* を用意する。申込の方法は多様であるが、館あるいは広くボランティア活動に関するウェブサイトを通じた場合が多い。採用の手順としては、①申込の中でボランティア希望者が関心のある活動部署についてたずね、②それをもとにボランティア・コーディネーターがその活動部署の職員と面接の準備を整え、実際の面接は多くの場合その職員が行い、希望者がその活動希望部署に適していると面接を行った職員が感じたら、その希望者への研修の準備を始める。

ボランティアの養成・研修については、ボランティア・コーディネーターは基本的に全体でのオリエンテーションの責任者となる。その後の研修については、そのボランティアの活動部署において、職務としてボランティアと直に接する職員によって企画される。ボランティアがある特定分野に適していると判断したら、その分野での仕事のための研修を行う。また、新しいボランティアに対しては、すでに活動しているボランティアが、研修役 (*trainer*) というよりも助言者 (*mentor*) として働くこともある。

ボランティア・コーディネーターは、季刊のニューズレターの発行、表彰パーティーなどの行事の開催の他、*supervisor* を中心とする施設職員がボランティアとかかわる上での手助けも行う。また、ボランティア活動に関する外部への広報の役割や他施設のボランティア・コーディネーターなどの職員との交流・情報交換も行っている。

さらに、施設にとってボランティアを受け入れることは、ボランティアが施設職員の職務を支援するという点でもあり、同時に、地域住民とくに新しい地域住民・施設のサービスが十分に行き届いていない (*underserved*) 地域住民に対する働きかけでもある。他方、ボランティアにとっては、自然科学についての学習や技術の習得であったり、余暇の享受、他者との出会い、学校からの課題を解決することなどの意味がある。

### (3) ヒアリング内容の分析

以上の2つの事例から考察できることとしては、次の3点を挙げることができるであろう。1点目は、ボランティアの採用・養成・研修に対するボランティア・コーディネーターの役割についてである。ボランティア・コーディネーターは、ボランティアの採用においては全体を通して中心的な役割を担っており、またボランティアの養成・研修においてはオリエンテーションの段階で中心的な役割を担っている。館種による違いはあるが、いずれの館においてもボランティア希望者に対しては専門的な知識・技術の有無を必ずしも前提としているわけではなく（それらはその後の養成や研修、及び実際のボランティア活動を通して身に付けていくことが期待されている）、館側では活動に対する熱意であったり他のボランティアとの協調性の有無を重視していることもヒアリングの中で述べられていた。採用と養成・研修におけるボランティア・コーディネーターの役割（採用と養成・研修に関する館としての一連の職務の中でボランティア・コーディネーターがどれほど中心的な役割を担っているのか）の相違は、館側がボランティア希望者の事前の能力・資質として何を求めているのかということに起因していると考えられる。

2点目は、ボランティアの採用や養成・研修に加えて、ボランティア・コーディネータ

ーが日常的にボランティアとどのように関わっているのかという点である。ボランティア・コーディネーターは、ボランティアの活動内容に直接関わるといよりも、ボランティア同士であったりボランティアと職員、さらにはボランティア受け入れに関わって職員同士の接点を設けたり情報をやり取りする上で重要な役割を果たしている。本稿で取り上げた先行研究からも分かるとおり、「コーディネート」という表現には実に多様な役割が含まれていると考えられているが、特に人と人とを結び付ける役割、そしてその役割を果たすための（容易には形式化できないような）能力・資質が求められることになる。そのような能力・資質は、いくつかのケース・スタディを積み重ねていく中で共通に見出せる要素を整理・分析していくことで明らかにされる性格のものであろう。

3 点目は、ボランティア・コーディネーター自身が、館がボランティアを受け入れることの意味をどのように理解しているのかという点である。これは日本の事例においてもしばしば指摘されることではあるが、ボランティアの受け入れは、施設とボランティア（ボランティア活動を行う地域住民）の双方に有益であることが強調されている。そこでは、施設にとってのみ有益であるという視点は基本的に存在していないというだけではなく、ボランティアにとってのみ有益であればよいという視点とも異なっていることは注目すべき点であろう。単に施設が地域住民に奉仕すべきであるという一方向的な理解ではなく、地域住民が施設の活動の発展にどう関わることができるのかという点と合わせた双方向の理解が存在している。

#### 4. 今後継続して検討を進めていく必要がある問題

本論文で取り上げた先行研究、及びアメリカ合衆国の博物館 2 館に対するヒアリングの内容をふまえ、社会教育施設におけるボランティア・コーディネーターの意義と課題について今後継続して検討を進めていく必要がある問題について、第 2 章で言及した執筆者の 2 点の問題意識に従って整理すると、以下のようになる。

##### (1) コーディネーターの役割の重点化に関して

ボランティアの受け入れに関して、第 3 章で取り上げた 2 館も含めて一連のヒアリングの全対象館に共通することの 1 つに、ボランティアの受け入れが施設と地域住民の双方に有益であるという認識が少なくとも施設の側にあると同時に、日本において見られるようなボランティアの学習や自己実現といったようなボランティア受け入れの目的についての認識は少なくとも調査対象館の側においては基本的には見られなかった、ということが挙げられる。裏を返せば、日本の社会教育施設がボランティアを受け入れる際には、ボランティア・コーディネーターが自らの役割を果たす上で、ボランティアの学習や自己実現の機会の提供と充実という観点も持たなければならないケースが少なくないであろうし、そうした観点は（特定の施設職員がボランティア・コーディネーターを担う場合には）ボランティア・コーディネーター以外の職員にとってはどうしても希薄になりがちであることは否定できない。しかし、そうした観点をふまえたコーディネーターの役割であったり資質については必ずしも明確化されているとはいえず、実際にボランティア・コーディネーターを担っている人の個人的な能力・資質なり努力に負わざるを得ない状況が続いているため、この問題についてのさらなる検討が求められる。

(2) 誰がボランティア・コーディネーターとしての役割を果たすのかに関して

第2章で、ボランティアそれぞれがコーディネーター的役割を意識しながら活動するという視点を取り上げたが、こうした視点は本章(1)で取り上げたようなボランティア・コーディネーターに求められる役割の存在を前提とする際に出てくるものであることは言うまでもない。

ただし、その際に、職員がボランティア・コーディネーターを担う場合と比較して、職員であるから果たすことのできる役割(求めることのできる能力・資質)は誰がどのようにに担うのか、という問題が生じてくる。同様の役割を全てボランティアがコーディネーター的役割を意識しながら活動することに全面的に委ねてしまうことは現実的に有効であるのか、またそもそもそうしたことが可能なのかという点は、検討が必要不可欠となる点であろう。とすれば、職員の側にボランティア・コーディネーターを担う人間の存在を前提として、かつボランティアそれぞれがコーディネーター的役割を意識しながら活動することが当面は現実的かつ有効な取り組みであり、そのような取り組みの成果を通して、改めてボランティア・コーディネーターの担い手の問題についても再検討を試みるのが最善の方策であろう。

注記・引用文献

- 1) 白石克己「はじめに一なぜ「ボランティア・コーディネーター」かー」国立教育会館社会教育研修所編『ボランティア・コーディネーターの養成・研修の在り方とプログラム試案』1997, p.3.
- 2) *Ibid.*, p.4.
- 3) 筒井のり子「ボランティア・コーディネーターの役割」国立教育会館社会教育研修所編, *op.cit.*, pp.18-22.
- 4) 興梠寛「ボランティア・コーディネーターの役割と期待」国立教育会館社会教育研修所編『ボランティア・コーディネーター養成のためのプログラム開発の視点』1998, pp.59-71.
- 5) 財団法人日本科学技術振興財団編『平成9年度 科学館におけるボランティア活動の推進に関する調査とプログラム開発』1998, p.14.
- 6) 財団法人日本科学技術振興財団編『平成10年度 科学館におけるボランティア活動の推進に関する調査とプログラム開発』1999, pp.21-23.
- 7) 鈴木眞理『ボランティア活動と集団一生涯学習・社会教育論的探求』学文社, 2004, p.171.
- 8) このヒアリングは、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)「生涯学習施設経営評価の開発的研究：参加・効率性と相互扶助・専門処理システム」(研究代表者：鈴木眞理)の一部として計画・実施されたものである。また、その概要は、社会教育計画研究会編『アメリカ合衆国における博物館ボランティアの諸相—インタビュー調査の結果から—』2008、にまとめられている。
- 9) 施設概要については、ヒアリング自体の内容の他に、American Association of Museums, *The Official Museum Directory* (36<sup>th</sup> edition), National Register Publishing, 2006、のデータを引用している。